

---

# 紅蓮ノ月

神崎 ゆりあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

紅蓮ノ月

### 【Nコード】

N2159K

### 【作者名】

神崎 ゆりあ

### 【あらすじ】

自分は死んだと思っていた。だけど、手に感覚はあるし、会話もできる。ただ、空腹もなければ、息切れもない。ふしぎな世界。私はどうして“選ばれた”のか。少女は何もわからぬまま、その世界の敷くレールにそってすすんでいく。

## prologue . 「空へ」

ここ最近、この星はどうにかなってしまっただろうか。私が思っている以上に、この星は残酷である。例えばの話、地震や雷は勿論のこと、私の恋愛事情にまで頸を突っ込んでくるほどの残酷ぶり。どうにかならないのかしら。

ある時の事。私が彼と夕方一緒に帰っていると、突然の地割れ。ちよつど、私と彼の間を引き裂くように入ったそのひび割れはそのまま私たちがつないでいた手を引き離した。

またある時の事。私が彼とメールしていると、突然の雷。今は携帯電話があるおかげで家の電線を断ち切った雷も私の携帯には関係ないかなと思っていたところに図ったかのように電池切れ。その時の彼は、私の事を束縛したがる人だったから、次の日にどんなにメーラーを待っても帰ってこないと怒鳴られた。理由を話そうと思ったけど、こんな彼氏を説得する義理なんてないなって思ったら、いつの間にか一緒に居なくなっていた。

こんな事が何度も続くとさすがに偶然の産物とは思えなくなっている私が出た。お被いにも言ったし、SFが強そうな友達にも何人が相談してみたけど、一向にその傾向は収まらなかった。

なんか、むしろどんどんエスカレートしているみたいだった。

私はそんな生活が怖かったんだけど、それも慣れてきて一種の人生なんだろうなと半ばあきらめかけていた。別に楽しい事がない。友たわけじゃないし、そんな災害に命の危険を迫られた事はない。友達に話題として話すときには必ず言われるのが「よかったね、なに

もなくて。」で、そんなセリフももう聞きあきた。

まだまだ、災害は続く。地球にとっての災害であって、私にとっては一つのイベントでしかなくなっていた。私の周りの友達も、そんな災害を恐れ、少しずつ離れて行った。災害が起こっても私は何ともないと分かっているけれど、隣で災害を呼ぶ私みたいな存在がいて気持ちいいはずはない。それは間接的にも伝わってくるから、メールや文通なんかもしなくなっていた。

地球さん、私は何をしたっていうの？ さすがに友達が離れていくってのは、私にとってすごく悲しい事だった。

私は買い物に行くにしても、綺麗な景色を見に行くにしても、一人ぼっちだった。独りで夕方の細い道を家路についていると、反対方向から見た事もない老婆が歩いてきた。いや、歩いて来たのかは分からないけれど、気がついたときには目の前にいたから、はっとして私は立ち止まった。その老婆は深々と薄気味悪い頭巾をかぶっていた。

「おじょうさん、あんた、死ぬよ・・・。」

「えっ？」私は面喰ってしまった。初対面の老婆に死ぬと言われた。災害を周りに起こす力を持った私でも、その言葉はさすがに心に焼きついた。

「えっと、どういう意味でしょうか？」

落ち着きを取り戻した私は、老婆に尋ねた。すると老婆は、かぶっていた頭巾を更に深くかぶったかと思うと、何も話さずに私とすれ違った。すれ違った老婆をすぐに目で追いかけたが、不思議な事にもう気配すらなくなっていた。

相手は年のいった老婆である事を考慮して、「へんなこといわな

いでよ！」なんて叫ばなかった。でも、死ぬってという言葉は頭の中に引っかかったままだ。

死ぬってどういう意味だろう。私はそれから毎日その事ばかりを考えて、鬱になっていった。災害の次は、死。何かとりついているとしか思えない。

私は何が何だか分からないうちに、後日、いつの日かすれ違った老婆の予言通り、死んだ。死因は、不明。自分にすら分からないんだから、後で触ってくる他人なんかには絶対にわかりっこない。

そして、私は肉体を残し、空へと召されていったのだ。これが、この物語の始まり。

## 1st chapter . 「召喚」

「君の予言はいつもあたるね。何か、隠してるんじゃないだろうね。」

「いえいえ、滅相もございませぬ。ただ、ただならぬ気配は感じたのでございますので、少し気にはしておりますが。」

「いや、良い。もう下がね。」

「はい。」

私が再び目を開いたのがいつだったかは分からない。ただ、ここには時間なんて言う概念が存在していないようにさえ思えた。今の私に『自分は死んだ』という記憶が確かに刻まれていたからだ。

今目覚めた自分はきつと天国か地獄の中に居るのだろう。そんな事を考えていた。だって死んだんだもの。ふつうはそう考えるんじゃないかな。

周りの様子はっていうと、全体的なイメージは白。白っていう事は天国かしら。地獄に白っていうイメージは間違っても出てこないし。でも、天国だって言う事も分からない。そもそも天国や地獄なんてのは人間が考え出した空想なんだって、分かっててもついつい信じてしまう自分がいる。

立ちあがって切り取られた空間のような部屋を少し歩きまわってみた。私がいる部屋。白い壁に塗られたふわふわとした空間。私の周りには何人かの人と私と同じように倒れていて、まだ気が付いていない。顔を近づけて見ると、息をしないのがわかる。周りの人たちは死んでいる。そういう表現が適切なんだろう。でも、私とその状況に動じる事は不思議となかった。

壁に手を当てて見る。ちゃんとつていう表現は悪いかもしれないけれど、生きているとき同様ちゃんとその間隔は手を伝わって神経を伝わって脳へと伝達されていった。感覚はある。生きているときと何ら変わりはない。『自分は死んだ』という記憶がある以外は。

「お目覚めかな？」

白い空間の中に人の気配がした。私は振り向くと、その男はにこつとほほ笑んだ後に私の方へと近づいてきた。男は年齢は私と同年か少し上。人間でいえば悪くない顔立ち。むしろいい。だけどこの世界でそうなのかは分からない。数人が倒れていた白い空間にはいつの間にか人の姿はなく、私とその男だけが存在していた。

「驚かなくていい、君は合格者なのだから。」

「合格者？」

私はとつさに聞き返していた。でも、男はそれ以上何も話さなかった。私に向けた手で手招きをして、私が近付くと男は振り返った。ついてこい、男がそう言っているような気がした。

どれくらい歩いただろうか。普通ならとつくに運動不足の体が悲鳴をあげている頃だろう。しかし、どれだけ足を前に進めても疲労がなかった。それどころか、空腹も、渴きさえもなかった。やはり私は死んだのだな、とこの時実感した。心は驚くほど静かだった。この空間のように、真っ白だった。

「君は死んでないよ。」

それまでずっと無言で私の前を歩いていた男が、ふいに立ち止り言った。まるで私の思考を読み、それに応えたかのようなセリフ。

「・・・へ？」

私は間抜けな声で聞き返した。自分の声のあまりの間抜けさに、恥

ずかしさで顔が火照るのがわかった。

「正確には、まだ死んでない、と言うべきかな。ここはあの世とこの世の狭間なんだ。ここに来た人間は本当に久しぶりだよ。『合格者』だけがここに来る事が出来るんだ。」

男は、嬉しそうにいった。あどけないその笑顔が、純粹に、素敵だと思つた。こんな風に私に笑いかけてくれた人、最近いたっけ。

「・・・合格者ってどういう意味ですか？」

いつもより早く動く心臓を抑えながら質問した。少なくとも、私はそのつもりだった。しかし、胸にあてた掌にはある筈の命の鼓動が伝わってこなかった。・・・心臓が動いていなかった。

「言葉通りの意味だよ。君は選ばれたんだ。これから君に・・・生き返ってもらおう。」

生き返ってもらおう。確かに彼はそう言った。合格者って、そういうことか。生き返る権利が貰えるってことなんだろうか。

「あの・・・」私が、男に声をかけると同時に男はその場に立ち止まった。

「質問タイムはこれで終わり。目的地についた。」

私はこの男に何が聞きたかつたんだっけ。そんな事を思いながら男が立ち止ったその先を見つめた。大きな建物。やはり、この世界への白というイメージは崩れない。その建物は白く、どこか地上のタワージマハルを思い出させた。白の空間の中の、白。景色に溶け込んでしまいそうなそのたたずまいが余計神聖さを醸し出していた。

「こここの主が君に挨拶したいってさ。」

私は何を言葉にしていいか分からなくなり、その男が建物に入って

いくのにそのままついて行っていた。

建物は本当に大きな建物だった。見た目よりももっと大きく感じた。その建物を支える柱は一本一本が太く、デザインの面からも美しいと感じる事が出来た。ただ、これを芸術だという判断をするほど私は美術に精通してはいないけれど。

「この建物は、タージマハルっていう建物なんだってさ。昔、一人の神様が作ったらしいんだけど、何をこのんでこんなデザインにしたんだろうね。僕は芸術とか分かんないから、美しいとかきれいっていうのは分かるんだけど、さすがにこの建物はその域を超えている気がする。」

男はいきなりしゃべりだす。なんだかその分、沈黙が続いていた2人の間にほっこりとした空気が流れた。でも、私が気になったのはそれだけではない。

「タージマハル・・・」

私はそうつぶやいた。男は私の方を振り向いて、にっこりしながら建物の説明を続ける。

「確か、地球にもこんな建物があったね。あれは勿論、模造品だよ。こつちがオリジナル。少し前の事だったかな、あれが地球に現れたのは。確か、なんとか王っていう王様が奥さんのために建てたんだっけ。その王様も君と同じ合格者だったんじゃないかな。僕がこちらの担当になる少し前の話だから直接は関係してないけれど、こつちがオリジナルっていうのは本当の話さ。」

「あ、はあ・・・」私は返す言葉がなかった。男はよくしゃべるようになっていったもんだ、なんて印象とても本人の前でなんて言えない。

「ほら、しゃべっているうちについたよ。ここが『管理者の部屋』だ。」

男がそう言って立ち止った男は両手で扉の取っ手を握ると、ふんと声をあげて扉を思いつきり押した。重い扉は音を立てて開き、扉の向こうを私と男の前に見せた。

扉の向こうには結婚式なんかで使われる赤い絨毯があつて、男と私、2人でバージンロードを歩いているような、そんな変な気分になつていた私は『管理者』と呼ばれる人の前に立つと一気に現実に引き戻された。

「君が、『合格者』かね？」

「はい、そのように聞いています。」

『管理者』は王座にどつしりと腰かけ、バージンロードの終着点に座っていた。他の部屋も凄く豪華な装飾で彩られていたが、『管理者の部屋』の装飾はもっとすごかった。辺り一面がキラキラ輝いていて、まぶしかった。金や銀はもちろんのこと、地球ではお目にかかれないような宝石なんかもちりばめられている、そんな空間だった。

「私はこの世界の『管理者』だよ。エイジエからきているだろう。」

エイジエなんていう名前は聞いた事がなかったので、私は首をかしげた。でも、大体察しはつく。ここまで案内してくれた男、きっとこの人がエイジエなんだと思う。

「なんだ、自己紹介もしていないのか。まあ、そんな名前なんてどうでもいいか。この世界じゃ何の役にも立たない。今のは忘れてくれたまえ。エイジエは、『案内人』だ。」

『案内人』と呼ばれた男は、少し戸惑った後、顔を赤らめた。

「その様子だと、まだ説明していないみたいだね。まあ、いい。私から直接説明をしよう。」

『管理者』はそういうと、ゆっくりとした口調で口を開く。

「この世界は、天国でも地獄でもない。かといって死んでいるというのに一番近い場所であるのには変わりはない。一種の霊界とか閻魔さまのところとかそういった類のものひとつ。そして、ここは宇宙に存在する。」

私は静かにその話を聞いていた。信じられない事が現実起きているのだから、何もかもを受け入れるしかない。自分にそう言い聞かせた。

「ここに居るのは、『管理者』である私と『案内人』である彼。それから『合格者』である君の3人。『合格者』は正確にはこの後の試験によってその名称を改める事になるのが、それはまた次の話のときにでもするでしょう。『管理者』『案内人』『合格者』は3人で一つのまとまりとして考えてくれたらそれでいい。そして、『管理者』は『案内人』を通じて『合格者』を召喚するという関係に当たる。つまり、君は私によってここに召喚されたのだよ。」

ここにきてようやく信じがたい話にも表面が見えてきた。私は『管理者』によって呼ばれた事、そして、まだ、私は死んでなんかいないという事。

## 2nd chapter 「ドアの向こう」

『案内人』はじつと直立不動のまま立っている。私としては口をはさんで空気を和ませてもらいたい他のだけけれど、『案内人』は確実に『管理者』の前では簡単には動けないみたいだ。私の頭の中で次のような式が成り立つ。

『管理者』 > 『案内人』、 『管理者』 > 『合格者』、 『案内人』 > 『合格者』

私は新入社員のようなもので、ここでは勿論一番下っぱなのだ。別にそれに苦痛はなかったが、居心地の悪さはここに居る時間と比例して大きくなっていく。

『管理者』は、3人の関係を話した後、少し別の話をして私をあらかじめ用意してあった部屋へと通してくれた。『管理者の部屋』ほど豪華な装飾などは施されていないが、それなりに美しい作りとなっている。部屋の中の家具は、シングルベッドが一つと、少し大きめのクローゼットが一つ。それだけのシンプルな作りだったが、装飾はあちこちに散らばっている。電飾一つとっても、どこかの芸術家の作品のような出来栄である。私はとりあえず大きなベッドに腰掛けた。

まもなくドアをノックする音が聞こえた。ノックからあまり時間のたたないうちに、ドアが開き『案内人』が入ってきた。

「この部屋の使い方を少し説明させてください。」  
ここにきてまたもや説明。うんざりする。だけど、私は新入社員なのだ。慣れるまでは説明の嵐に耐えなければならぬ。

「あれはベッドです。そこで眠る事が出来ます。」  
そんなことは知っている。

「そしてあれはクローゼットです。衣服の管理はあれ一つで十分だ  
と思います。」

そんな事も知っている。

「説明は以上です。」

「は？・・・」私はまたもや後で後悔するような顔をしてしまった。  
しかし、疑問は残る。

「それだけ？説明って・・・。」

「ええ、十分かと。」

確かに十分だけれど、しなくてもいいじゃないか。と思う私を背中  
にいつの間にか『案内人』は私の部屋のドアを閉め、私の目の前か  
ら消えていた。

私はベッドに横になり、不思議な世界の1日目を終えた。これが  
1日という概念があつての話だが。

次の日の朝、私はベッドから起き上がりカーテンを開けようとし  
たが、この部屋にはカーテンはもちろんのこと、窓なんてものがな  
かった。明るい装飾や、灯で分からなかったが、窓がなかった。

カーテンを開けられなかった私はもう一つの疑問に直面した。ク  
ローゼットである。クローゼットの中身は、空っぽ。大体どうして  
クローゼットなのか。どうせなら、もっと暖房器具とか本棚とかに  
してほしかった。この部屋の意図がさっぱりわからない。

「説明の時間です。」

いつの間にか『案内人』が私の部屋に立っていた。

「ちょっと、女の子の部屋に何勝手に入ってくるのよ。ノックぐら  
いしなさいよ。」



「別に責めているわけじゃないよ、それが君のやり方だというならね。」

「彼女は少し不安定なので、試練は厳しい方がいいかと。」

「もしかして、あの部屋に入れたのかね。」

「はい、私は『案内人』です。」

「無事に帰ってきてくれるといいのだがな。」

「私もそう思います。」

『管理人』『案内人』はしばしの語らいの後、別れた。

目が覚めた。確か、部屋に閉じ込められた後、意識が遠のいていったところから意識がはつきりしない。つまり、その次の場面だという事になる。私は起き上がり、とりあえず周りを見渡してみる。

草原。とても部屋の中だとは思えない作りである。今まで信じがたい事をしていなかったら私は発狂し三月記の虎のごとく身を変えていたかもしれない。

少し歩いてみた。いつものように息は切れるし、運動不足の体も悲鳴を上げそうになる。疲労を体を感じる事が出来る。私は生き返ったのだろうか。ほつぺたをつねってみる。これは夢ではない事が分かった。最初から夢でない事は分かっていた。つまり、無駄にほつぺたを痛めてしまった。

歩いている途中、一人の若者に出会った。いくら名前を聞いても教えてくれなかったが、その若者はこの先に村がある事を教えてくれた。その若者と別れた後は、誰とも会わずに再び私は歩き始めた。

村は案外遠いところにあった。若者の言うこの先というのは非常に遠い“この先”だったに違いない。しかし、今の私にとってはそんなことはどうでもよかった。村という存在が私の心を安心させた。

同時に、ここが現実世界だとしたら、と、身の回りに起こる災害の為に離れて行った友人たちに会うのが少し怖かった。

村の立て看板を見る。文字はかすれていて見えない。ただ、【村】とだけはつきりと読み取る事が出来る。村である事には間違いはない。私は、村の中へと足を進めていく。

村には活気などなかった。みんな暗い顔をして、うつむいている。同じ範囲を行ったり来たりしている。人というより、どこか機械じみた印象を受けた。お互いの会話もなく、ただ同じ場所を行ったり来たりしている。

勇気を出して話しかけて見た。

「あの、すみません。ここはどこですか。」

私の問いに対しての回答はすごく早かった。早いというより、反射的に聞かれる事が初めから分かっていたような反応だ。

「この村には名前などありはしないのだよ。」

名前がない村。この時はまだ私は気づいていなかったのだが、ふとしたことからおかしい事に気付き始めた。

この村についての話を聞こうと思い、何人かの村人に一度ずつ話しかけていった。2人、3人と話を聞いて行くうちに、村人の話し方の奇妙さが出てきた。

奇妙さと言っても、普通に話しかけ、対応してくれる分には何の問題もない。ただ、本当に奇妙なのだ。というのも、全ての対応が反射的なのだ。しかも、同じ言葉しかしゃべらない。私が、「この村で休める場所はありますか？」と尋ねると、村人は「あの木陰で休むといいよ。」と言ってくれた。その村人に今度は「その傷はどうしたんですか。」と尋ねると、「あの木陰で休むといいよ。」

と言つ。

どんな村人も、私の問いには答えしてくれるが、一度答えた村人はその答えしか言わなくなるのだ。村人の数は限られている。その中であらゆる情報を手すべきであった。私は確認のためだけに村人の約半数にくだらない質問を投げかけ、くだらない回答を得ていた。

今はすっかり『案内人』『管理者』のことなど忘れていた。私はこの村の事で頭がいっぱいだった。この村は何なのか、私がここに来た理由、それらを考えているうちにどんどん分からなくなっていく。

### 3rd chapter . 「脱出」

「どうやら、気付いたみたいですね。」

「しかし、もう遅い。」

「でも、これからでしょう。あの子には頑張ってもらいたいものです。」

「そうだな、貴重な『合格者』なのだ。」

「では、僕はこれで。」

「うむ、ご苦労だったな。」

この村の人口は30人。私は20人ほどに質問して得られた情報  
が、「木陰で休む事が出来る。」「村には週に一度イベントがある。  
」「そのイベントは明日。」というものである。確かめているうち  
に、自分の行き場を狭めていたのだ。

もう、これ以上尋ねる質問がなかったのもあり、本質を問う質問  
には答えてくれないというのもあり、私は少し休むことにした。村  
人から聞いた、「木陰で休む事が出来る」を頼りに、大きな大木の  
木陰に腰掛けた。その大木はこの村で一番大きく、背も高い。何人  
かの村人もこの木陰に座っていて、休憩所がないこの村にとっては  
唯一のオアシスと言ったところだ。

そういう私も、木陰でゆっくりしているうちにうとうととしてきた。

目が覚めると、がらりと雰囲気の変わった村がそこにはあった。  
なんだか、賑やかである。賑やかさは昨日の活気なかった村から  
は考えられない。私の休んでいた木陰の周りに人はいなくなってい  
た。村中の村人が村の中心で何やら騒いでいるのが聞こえた。

気になり、行ってみると30人の村人が踊りを踊っていた。どの村人に話しかけても「ああ、たのしいなあ。」「やっぱり祭りは楽しいな。」と、昨日と違う答えが返ってくる。ただ、今日は質問に答えてくれない。村中が私を見えない者として扱っているように感じた。

「村には週に一度イベントがある」「そのイベントは明日」と言っていたが、私がうとうととしているうちにそんなに時間がたったのだろうか。不思議なものだ。また、私は大きな大木の木陰へと歩いた。

歩く途中、一枚の紙切れを拾った。何やら絵が描かれている。そして、その絵の説明のような文字も書かれている。一部の文字は読む事が出来た。その紙きれの上の方には、『希望の剣』と書かれている。そのほかの文字はなぜか読む事が出来ない。私はその紙きれを服の中に入れた。

大きな木の木陰につくとなぜか眠くなる。私はまた木陰でうとうととしてしまった。

目が覚めると、村の様子が元に戻っていた。さっきまでの活気があった村ではなく、みんな元通り活気のない表情をしている。木陰から居なくなっていた村人たちも木陰に座っている。

何か尋ねるとやっぱり「週に一度イベントがある」「そのイベントは明日」などの情報しかくれない。

この木陰もなんだかおかしい。私が休もうと考えると、それだけでうとうとしてくる。うかうか休んでなんかいられない。

そして、極めつけはイベントの日に村で拾った紙切れである。一部の文字は読めるのに、それ以外の文字は読む事が出来ない。

これらは何を示しているのだろうか。不思議な世界から、ドアを抜けて現れたこの世界。この世界も謎だらけである。私はいつの間にか、この謎を考えることに没頭していた。疲れたら木陰で休み、また考える。そんな試行錯誤をしているうちに、私はある結論にたどり着いた。

6 回木陰で休むと、イベントがある日がやってくる。つまり、木陰で休む事はそれ自体がその日の終わりを指していた。また、木陰で休まない限りはずっと日は変わらない。いくら待っても日は落ちないし、だから、次の日も来ない。村人は時計なんかしていないし、私も時計なんか持っていない。時間という概念が全て、この大木にゆだねられているのである。極端な話、この村には時間が流れていない。つまりはそういう事なのである。

それにしても、多くの時間を無駄にしたと思っていたが、時間が流れていないことが分かったらなんだか安心した。閉じ込められたのには違いはなかったが、一つ一つ物事が明らかになっていくとそんな閉塞感から少し解放された気分になるのだ。

まるでテレビゲームのような世界。村という狭い空間ではあるが、RPGとシミュレーションを同時にやっているような、そんな感じである。

そろそろ分かってくるんじゃないかなって時に、思わぬ邪魔ものが現れた。いつしか私を迎えにきた『案内人』だった。

「さて、そろそろ帰りましょう。『管理者』が待っている。」  
これからが大事な時だって言うのに、あまり帰りたくはなかった。

「まだ、全部終わってないのよ。きつともう少しで真実にたどり着くはずなの。」

『案内人』はこう答える。

「真実？いえ、そんなものここにはありませんよ。私が作った仮想空間なのでから。」

私は「へ・・・？」と、ポカンとした。

「まだ、完成していなかったのですよ。このゲーム。イベントはむちゃくちゃだし、質問には答えてくれない村人には困ったものでしょう？」

なんだか、私は一杯食わされたような気持ちになった。いわゆるテストプレイヤーと言うやつになったのだ。

「でも、アクシデントも起きました。全てのあなたの行動は私の想定内で行われていたのですが、一つだけ。あなたが拾ったその紙切れ『希望の剣』ですが、私はそんなものプログラムした覚えはありません。」

「どういう事？」

「つまり、あなたの周りには災害が起こるってことですよ。」

私は『案内人』にうまくはぐらかされたような気分だ。しかし、彼はその事については詳しくは話してはくれなかった。

『案内人』は何やら呪文のようなものを唱え始めた。ぶつぶつぶつぶつ……。すると私たちは黄色い光に包まれ、このゲームの外へ飛んで行った。飛んで行ったように思えたが、このゲームのスイッチが切れたただけだったようだ。この事は、ゲームから脱出した後、ドアの向こうのあの部屋にある据え置き型のゲーム機を目にするまで信じられなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2159k/>

---

紅蓮ノ月

2010年10月16日00時40分発行